

P C 1：阿望堇青の記憶

母の死

20年前——私が10歳のとき。

家の近くで一人の女性が亡くなった。最初は飛び降り自殺だと聞いた。

その次に聞いたのはこんな話だった。

彼女は嘆きのダイヤに呪われたのだ。あの人は呪われたダイヤを持っていて、そのダイヤに魂を吸い取られた——そんなオカルトじみた話。聞いたときは馬鹿げた噂だと思った。

最後に聞いた話はこうだ。

彼女は殺された。犯人は阿望^{りんよう}燐葉——私の母親だ、と。

亡くなった女性が人殺しと叫ぶのを聞いた人がいるのだという。その近くで慌てて逃げ去る母の姿を見た人がいるのだとも聞いた。

あり得ないと思った。ふざけていると思った。泣きもしたし怒りもした。

あの優しい母がそんなことをする訳がない。

でも——目の前で母が警察に連行されたとき、私は何もできなかった。

母が帰ってきたのはそれから2カ月後だった。女性が飛び降りるのを目撃した人物が現れ、誤認逮捕だったことを警察が認めたのだ。

母は落下現場に出くわしたが、ショックで通報するのを忘れ、その場を去ってしまっただけだという。

それでも世間の噂は変わらなかった。

警察の発表は小さく小さく新聞の隅に載ったっきりで、出歩けば周りの人が母を見て距離を取った。人殺しだとひそひそ囁き合っていた。

母が亡くなったのはそれから半年後だった。元から体が弱かったのに加え、拘置生活の負担が祟ったのだろう、と医者は言っていた。

それを聞いたとき、私は違うと思った。間違っていると思った。

だって——母は警察に殺されたのだ。

父からの呼び出し

父——阿望^{つよし}剛から連絡があったのは昨年の11月のことだった。

抱えていた刑事事件の弁護が一段落し、私はちょうど次に取り掛かる案件を探していた。刑事事件なら手広く引き受けているが、本当にやりたいのは被疑者が否認している事件。それも殺人事件だ。

警察は信用できない。その一心で弁護士になり、弁護士になってからも様々な警察の不正を見てきた。

母の悲劇を繰り返さないため——そんな気持ちはますます強くなり、仕事にも熱が入る。次こそは殺人事件を、と考えていた時期だったので、出鼻^{でばな}を挫^{くじ}かれた気分だった。

宝石展を開くから手伝いを頼みたい。それが父の頼みだった。

当然断りの連絡を入れたが、父は頑^{かたく}なだった。それから数回断ったが、一生の頼みだからと言い出してきた辺りで、こちらから折れた。

宝石展が開かれるのは、温泉地として有名な箱根^{はこね}の美術館だった。

東京からでも2時間あれば行くことができる。宿を取るほどでもないと思ったのだが、既に父が旅館を手配していた。

諦めて休暇だと思ふことにしよう。そう決めて貰い物の日本酒を片手に箱根に向かった。忙しくて飲む機会^{じょうもの}のなかった上物だ。

旅館には家族が揃っていた。父と、それから私を含めて4人の兄弟姉妹。年末年始と母の命日以外で家族が揃うのは珍しいことだった。

到着した晩——12月の初めだったが、家族で夕食を囲んだ。日長^{にっちょう}は「久しぶりに高いものが食えるぜ」と言って上機嫌だったが、翡翠^{ひすい}と月長^{げっちょう}は違った。

翡翠は父が勝手に私達の宿を取ったことに怒っていた。別に東京からの通いでもいいし、宿を取るにしたってもっと安いところがあったのに。そう愚痴^{ぐち}るのを聞いて、相変わらずの儉約家^{けんやくか}ぶりだなと思った。

月長は仕事が心配で食事が進まないようだった。父の会社——阿望工業を継ぐ修行中の身である月長は、どうも会社の様子が気になって仕方がないという様子で、しきりに自分のスマホを確認していた。

そして父はといえば、そんな私達の様子を見てにこにここと微笑^{ほほえ}んでいた。

嘆きのダイヤ

家族の間に不穏な空気が流れ始めたのは、12月の中旬。

本格的に宝石展の準備が始まった頃だった。

まず私達が手を付けたのは会場の設営と展示会の宣伝だ。設備の調達を翡翠が、スタッフの調達を日長が、会場レイアウトやシフトの決定を月長が、宣伝を私が担当した。

作業を初めてすぐ、私達はこの宝石展の目玉を知った。

・・・ダイヤ——呪^{のろ}われたブルーダイヤモンド。

私は目を疑った。どうして母を死に巻き込んだあの宝石がここにあるのだ。それは母が誤認逮捕された事件で、飛び降り自殺した女性が持っていた宝石だった。

その傍^{はた}迷惑なダイヤを父は手に入れ、こともあろうに宝石展の目玉に据^すえようとしているのだ。私達にとっては母の仇^{かたき}と言ってもいいダイヤを。

もちろん父に理由を問い質したが、父は「あれは私にとって、私たち家族にとって特別なダイヤなんだ」と言うばかりで、納得できる説明はなかった。

父は何かを隠している。

弁護士としての私の直感はそのささや^{ささや}囁いていたが、結局真実^はを吐かせることはできなかった。

年の明けた1月10日。

嘆きのダイヤを展示するメインホールが少し物足りないということで、大きなシャンデリアが飾られ、会場の設営は完了した。

怪盗ホープの予告状

1月中旬から始まった宝石展は、さほど賑わいはしなかったが、特に問題が起きることもなく続いていた。

それが突然^{ものもの}物々しくなったのは、2月1日のことだ。

嘆きのダイヤを貰い受ける——怪盗ホープからの予告状が届いたのだ。

怪盗ホープと言え、半年ほど前から^{ちまた}巷を騒がせている美術品泥棒だ。なんでも変装の達人であり、警察でもその正体は掴^{つか}めていない。

すぐに刑事と、それから嘆きのダイヤに掛けてあった盗難保険の担当者が集められた。

この担当者というのがこれも変わった人物で、犬吠埼瑠璃^{いぬぼうざき るり}という保険会社に雇われた探偵だった。

そもそもは嘆きのダイヤの盗難対策を完璧にしたいという父の要請^{ようせい}を受け、盗難保険の会社が彼女を派遣してきたのだ。盗難事件の専門家だと聞かされた。

彼女が来たのはちょうど設営が終わり、宝石展が始まる前のタイミングだった。

彼女は数日間に渡って設備やレイアウトを確認し、父の施したセキュリティに太鼓判^{たいこばん}を押した。これなら怪盗ホープが来ても盗むことはできないでしょう、と。

もちろん、このときはたとえ話として怪盗ホープの名を出しただけだった。それがどういう訳か、本当に予告状が届いてしまったのだ。

2月1日のうちに改めて警察による会場設備の見直しが行われた。

結果、警察の出した結論は探偵・犬吠埼が出したものと同じだった。セキュリティは完璧。そしてそもそも、怪盗ホープは今まで予告状など出したことがなく、今回の予告状が本物かどうかもわからない。

ならさっさと帰ってくれと思ったのだが、会場を確認しに来た刑事・黒岩鋼^{くろいわこう}は、念のため刑事を何人か会場に張り込ませると言い張った。

もちろん私は反論した。ずっと刑事がこの場にいるなんて考えただけでぞっとするし、セキュリティは今でも完璧なのだ。私の意見に父も同調したが、黒岩もなかなか譲らず、結局は黒岩一人だけが会場に張り込むことになった。

警報の誤作動

刑事・黒岩が来てから間もない2月3日。

別館に火災報知器の警報が鳴り響いた。

近くにいた私と父はすぐに駆け付けたが、ほどなく誤作動だと判明した。別館のどこにも火事が起きていないことが確認できたのだ。

別館は嘆きのダイヤがある本館と比べると、価値の劣る宝石しか置いていない。だから館内の監視カメラの数も本館よりは少なく、セキュリティは一段落ちる。

念のためにその監視カメラを見てみたが、ほんの一瞬だけ映像がホワイトアウトしていたぐらいで、火災報知器の周りで異常は確認できなかった。

だが——何かある、という気がした。

直感だった。

それで犬吠埼さんと呼び出すと、彼女はすぐに到着し、捜査をしてくれた。

彼女は監視カメラの映像を指差して言った。

「ここをよく見てください。この1ドット……いえ、この1点だけ色が黒くなっているのがわかりますか？」

見てみれば、確かに白い壁を映している映像の1点だけ黒くなっている。

「ドット欠けというエラーです。初期不良に多いんですが、これは違いますね。見てください」

彼女は少し巻き戻した同じ場所の映像を見せる。確かに、その段階では黒い点は映っていない。

「ドット欠けはカメラが強い光を受けることでも起きるんです。このときですね」

彼女が示したのは、あの映像がホワイトアウトした瞬間だった。

「この瞬間、何者かが強い光を監視カメラに照射した。時刻を確認してください。警報が鳴る直前です」

つまり、と探偵はこちらを振り向いて言う。

「犯人はレーザーポインターのような強力な光を出す装置を持っていたんでしょう。それで火災報知器の熱感知センサーを熱した。強力なレーザーであれば、紙を燃やすくらいの熱を発しますから」

なるほどと納得すると同時に、何故という疑問が湧いた。

推理には納得できた。でも、何故そんなことをしたのかがわからない。横を見れば父も似たような表情で首を傾げていた。

結局、その疑問の答えまでは探偵も推理してくれなかった。

嘆きのダイヤが紅に染まる

事件当日の2月13日。

私は12時半頃に展示会場へ向かった。本館の金庫室に貴重品をしまい（この金庫室は私達家族の他にも、宝石展スタッフ、それから警備担当の犬吠埼さんと黒岩も使用している）、嘆きのダイヤが展示されているメインホールに向かう。

メインホールに入るには、警備員が二人立つセキュリティゲートを抜けなければならない。セキュリティゲートは金属検知器を兼ねているので、私は仕事用とプライベート用の2台のスマホを小物入れに置いた。それから、父に言われて買ったネックレスも。

ネックレスは小さなダイヤが着いたもので、父の発案で宝石展の間は、家族の全員がダイヤが付いた装飾品を身に着けることになっていた。

警備員に免許証を見せて本人確認し、ゲートを潜^{くぐ}ってからスマホとネックレスを受け取る。後ろでは、警備員の一人が私が持ち込んだ金属品をメモしていた。

中には月長と数人のスタッフがいた。

挨拶をしてから自分の持ち場につく。持ち場と言っても、展示会中はできるだけメインホール内にいて欲しいという父の要請に従って、ホール内で適当に立っているだけだ。

宝石の解説が欲しいという客がいれば日長に、宝石を買いたいという客がいれば月長に話を繋^{つな}ぐことになっている。私も翡翠も宝石には詳しくない。

その日の宝石展も変わったことなく終了し、後片付けをしていた19時21分。

メインホール内にいるのは私達家族と、刑事である黒岩だけだった。

日長が書類を持って近付いてくる。

「堇青、ちょっとこれ見てくれ」

受け取ってめくってみれば、どうやら様々な宝石の説明が書いてあるらしい。

「俺ばかり説明させられるのは不公平じゃねえか？」

日長はそんなことを言う。この書類を読み込んで、私にも説明の仕事を分担しろということのようだ。まあ、文章を暗記して話すのは得意だから問題ない。

わかった、と答えようとしたところでプライベート用のスマホが震えた。

書類を日長に返してスマホを取る。

元カレだった。

仕事が忙しくなったから合意の上で別れたのに、未だに連絡してくる。

「もう掛けて来ないでって言わなかった？」

日長に聞こえないように小声で言う。

相手はごにょごにょと言っていたが、要するに特に用事はないらしい。

日長が両手で書類を持ってこちらを見ている。

さっさと終わらせよう。そう思って別に用事がある訳じゃないのね、と聞くと「あれ？　今変な音しなかった？　大丈夫？」と返事があった。
「話を逸^そらさないで」

つい声が大きくなった。ずれた答えが返ってくるとイラっとするのは職業病かもしれない。確かに異音は聞こえたが、まずは質問に答えてほしい。

もう切るわね、と言って返事を聞かず通話を切る。

ずっと日長は書類を抱えたままで待っていた。

そのとき——ふっと館内が真っ暗になった。

停電か、と思って辺りを見回してすぐに異常に気付いた。

嘆きのダイヤが紅に輝いている。

闇に浮かぶように、嘆きのダイヤが光っている。

馬鹿げた噂が頭を過^{よぎ}る。嘆きのダイヤは触れたものの魂を吸い殺す——。

あり得ない、と首を振る。だが、無視できないことが起きた。

「やめろ、やめてくれ！」

父の声だ。何かに取り憑^つかれたように父が叫んでいる。

その少し後、轟音^{ごうおん}が響き渡った。何か巨大なものが床に叩き付けられる音。

気付けば、もはやその役目を終えたとも言うように、嘆きのダイヤは光るのをやめていた。

しばらく経って館内に光が戻る。

そこで私——私達が目にしたのは、落下したシャンデリアの下敷きとなって事^{こと}切れた、父・阿望剛の姿だった。

長女の務め

家族の誰かが父を殺したとは思えなかった。

少し軽薄^{けいはく}なところもあるが情に厚い日長。儉約家の度が過ぎることもあるが家族想いの翡翠。繊細だが人一倍責任感のある月長。

私には兄弟姉妹の中に犯人がいるとは思えない。

だが、警察はそうは考えてくれないだろう。遺産が少しでも入ってくるなら、それは立派な動機だと考えるはずだ。

警察から弟・妹達を守ること——それが長女としての私の務めだ。

幸い、神奈川県警なら協力してくれそうな刑事の当てもある。白石という大学の同級生で、留年ぎりぎりのところを私の手助けのおかげで回避できたので、今でも私に頭が上がらないのだ。ひとまず白石に連絡を取り、警察の動き方を見ることにしよう。